

研究ノート

英国教会伝道協会と J.R.ウォルフに関する初歩的考察

マーティン・ウォード

はじめに

中国におけるキリスト教史、そしてその一部分であるプロテスタント伝道史については既に広く研究されてきた。その結果としてラトレットの『中国におけるキリスト教伝道史』¹などが挙げられる。これらの研究を通じて、中国におけるキリスト教伝道においては、カトリック以上にプロテスタントの役割が大きなことが明らかにされてきた。1807年から20世紀の半ばにかけて、数十のプロテスタント伝道会が中国に渡来し、その下で活動していた宣教師数は6000人を超えるようになったのである。

とはいえ、これまでに著されてきた伝道会に関する事例研究は、伝道会の数の多さに比べて極めて少ない。そして、数少ない有名な宣教師を除くと個別の宣教師に関する研究も非常に少ない。こうした研究状況に対して、筆者は中国のそれぞれの地域におけるプロテスタント教会の歴史の様子について、個別の宣教師に即した事例研究を通し、もっと具体的に把握する必要があると考えている。

周知のように、当時の中国社会においてキリスト教は激しく否定されると同時に、広く受容されていた。こうした状況の原因をより深く把握することが、西洋と近代中国の関係というテーマを理解するうえで不可欠だと考えている。これまで様々な議論がなされてきたこのテーマを、さらに深く検討するためには、特定の伝道会や宣教師に関する事例研究を通し、通史に見える総合的考察や結論を避け、具体的にどの伝道会や人物がどこでどのように中国におけるプロテスタント伝道にかかわり、いかなる役割を果たしたのかを明らかにしなければならない、と筆者は考えている。

こうした研究は、さらに現在の中国社会、または現在の中国におけるキリ

スト教会に関する課題、例えば外国人宣教師の渡来禁止、または中国政府によって認められている唯一の教会である三自教会などの由来に関する理解に貢献すると思われる。

19世紀の半ばから中国に入り、もっとも広い範囲での伝道活動を行うようになった伝道会の一つが英国教会伝道協会 (Church Missionary Society, 以下 CMS とする) である。本伝道会はやがて香港や江蘇省、そして四川省などという広い範囲で活動するようになった。その中で CMS の福建伝道団がもっともたくさんの改宗者を獲得した伝道団の一つとなり、その中ではジョン・リチャード・ウォルフ (John Richard Wolfe, 1831~1915) という宣教師がほぼ 53 年間福建省で活動していた。

ウォルフは 1831 年の始め頃に生まれた²。彼は CMS の本部により派遣され、1862 年 4 月に福建省に入り、既存の CMS による福建省の活動に加わった³。中国でウォルフはメアリ・マクルホーズ (Mary Macle hose, ?~1913) というオーストラリア人の女性宣教師と結婚し、二人の娘が生まれた。そして 1868 年 1 月 13 日には息子が一人生まれたようである⁴。ウォルフは 1887 年に福州の大執事に任命され⁵、1912 年に CMS 全体の副会長となり⁶、1915 年 12 月 2 日に福州で 84 歳で⁷死去した。

本研究の目的はウォルフの福建伝道を取り上げ、その初歩的考察をすることである。そのためにこれまでに著されてきた中国における CMS の活動、またはウォルフ自身をめぐる先行研究の成果と課題、そしてウォルフに関する事例研究のために用いる史料を検討する。そのうえで、CMS による福建伝道の様子、それにウォルフ自身の活動と彼の中国観を考察する。

1. CMS とウォルフ

(1) CMS とその中国伝道をめぐる先行研究

CMS という伝道会は 1799 年に英国で設立され、それ以来 200 年以上に渡り世界中にキリスト教の布教活動を続けてきた。100 年以上前にはユージン・ストック (Eugene Stock, 1836~1928) が CMS の最初の 100 年間を描く通史⁸を書き、それ以来、少なからぬ研究が公にされてきたので、近年の成果を年代順にみていきたい。

まずはカールソンの『福州の宣教師、1847年～1880年』⁹という書物をあげることができる。本書は福建省における CMS と American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM) と Methodist Episcopal Mission, North (MEFB) の三つの伝道会の活動を比較している。しかし、その三つの伝道会に関する総合的研究であると主張しながら、CMS の宣教師であったウォルフに対する大きな関心を示している。このため、本書についてウォルフをめぐる研究として考察する。

近年における CMS 自体に関する研究の代表としてヒュイットの『成功がもたらす問題：1910年から1942年までの英国教会伝道協会史；二、アジア』¹⁰があげられる。その Vol.1¹¹はアフリカと中東と英国について書かれている。Vol.2において中国が取り上げられ、CMS が当時活動していた主な地域と活動を紹介している。その中で CMS の福建伝道団が取り上げられ、ウォルフについても短く述べられている。ウォルフが福建伝道団の成功に貢献したとみなされ、そして少しも批判されていない¹²。しかし、本書は英国教会の司祭によって書かれており、自己肯定的で楽観的な書物であり、ウォルフについても研究対象時期から外されているため詳しくは書かれていない。

CMS に関し、ウォード¹³とスタンリーの研究もあげることができる。『英国教会伝道協会と世界中のキリスト教；1799年から1999年まで』¹⁴という論文集はユージン・ストックに関する研究、または中東、アフリカ、インド、ニュージーランド、そして英国における CMS の活動、そして女性宣教師の果たした役割などに関する研究成果を挙げている。本書は、長い期間において世界の多くの地域でそれぞれの時代によって、様々な問題を抱えてきた近年における CMS 活動に関する研究の第一歩ではあると思うが、本書は 19世紀の後半と 20世紀の前半において CMS が活動していた重要地域の一つであった中国における活動について一切述べていない。

次にダンチによって『福州のプロテスタント教徒と近代中国の創立；1857年から1927年まで』¹⁵という書物が書かれた。本書はその題目通りに宣教師よりは中国人改宗者に関する研究ではあるが、当時福建省で活動していたすでに述べた三つの伝道会の政策などについても述べている。三つの伝道会のうち 1880年までにもっとも拡大していたのは CMS であったことも述べら

れている。また、ダンチもこれをウォルフの活動のためであったとみなしているの、これについてもまた次節で考察することにする。

ウエルチュの「ネリ、トプシとアニ：1895年8月1日、中国福建省におけるオーストラリア人のアングリカン殉教者」¹⁶は1895年に福建省で殺されたCMSのオーストラリア人女性宣教師を取り上げている。本論文が特定のCMS宣教師を取り上げているのは、こうした方法の有効性を暗示していると思うが、そこであげられている宣教師は中国で数年しか活動しておらず、中国における彼女たちの生涯と活動のためよりは、オーストラリア人にとっての彼女たちの死の意味を問うために研究対象となったと言ってよいであろう。

以上の先行研究は、200年間のCMSの活動に対する研究がなされているという点で、重要であるが、いまだその研究は初歩の段階にとどまっていると言えるだろう。

(2) ウォルフをめぐる先行研究

次にウォルフ自身をめぐる先行研究の成果と課題を考察していきたい。これまでCMSに関する先行研究の成果について述べたように、ウォルフはテラー (Hudson Taylor, 1832~1905) やモリソン (Robert Morrison, 1782~1834)、ギュツラフ (Karl Gutzlaff, 1803~1844) たちほど有名ではないが、全く知られていない宣教師ではない。最近30年ぐらいの先行研究においてウォルフについては何回か述べられてきた。

近30年においてウォルフのことについて初めて述べたのは上述のカールソンの『福州の宣教師 1847年~1880年』という書物である。以上述べたようにカールソンは福建省におけるCMSとABC FMとMEFBの三つの伝道会の活動を比較しており、福州でのプロテスタント伝道史におけるもっとも重要な宣教師の一人であったのはウォルフであると述べている¹⁷。カールソンによってウォルフの行った大規模な活動が重視され、ウォルフの態度と行動が何度も批判され、彼がアメリカの二つの伝道会よりも多く迫害等の事件において領事の干渉を求めたであろうということも指摘されている¹⁸。そして、カールソンは1878年に起こった大きな教案であった烏石山教案を取り

上げ、そこにおけるウォルフの役割を詳しく描き、最後にウォルフについて 1 ページほどにわたって批判し、中国人と宣教師の関係をもっとも破壊したこの宣教師は、実はキリスト教への改宗者の獲得でもっとも成功した人であったと書いた。しかしウォルフの成功によって引き起こされた問題が、その成功の価値を消滅させたと、最終的にウォルフを否定的に評価している¹⁹。三つの伝道会を総合的に取り上げたと主張するカールソンはウォルフに対する明確な執着を示している。これはまさにウォルフ自身に関する事例研究が必要であることを示していると思わされる。

次にダンチの『福州のプロテスタント教徒と近代中国の創立；1857 年から 1927 年まで』²⁰という書物はウォルフが福建省における CMS の活動に著しく影響を及ぼしたことや、教会の伝道活動を妨げる教育活動を避けるべきであると言ったことなどについて述べている。ダンチはウォルフの性格が横柄であると暗示してはいるが、カールソンと違い、それほど強くウォルフを批判していない。ダンチは福建省における CMS の拡大は基本的にウォルフのおかげであるとも主張している²¹。

中国語の先行研究として陳名実の「福州烏石山教案始末」²²があげられる。本論文はカールソンが詳しく述べている、1878 年に福州で起こった教案について述べ、そこにおける「胡約翰」（ウォルフの漢文名）の行動と態度について述べ、その「瘋狂」²³な意見、またはわがままで不和、そして中国側と衝突しやすい態度により本教案が悪化していったと述べている。

以上の研究以外に、近年はウォルフを取り上げる研究は見当たらないようである。以上の分析により、ウォルフが福建省のプロテスタント伝道史において重要な役割を果たし、そして英国領事の干渉を求めて、中国側と衝突し、大きな混乱を引き起こした人物であったのに、ウォルフ自身の活動とその展開を取り上げる研究がないことが分かる。

(3) 使用する史料について

19 世紀の後半と 20 世紀初頭のころ、すなわち今から 90 年ぐらい前に、中国福建省で伝道活動を行っていたウォルフに関する事例研究を行うために、当然ながら信頼できる有意義な一次史料が不可欠である。幸いなことに CMS

の設立から本伝道会に関する記録、手紙、委員会の記録などが大切に保存されてきた。ある程度の史料は CMS 本部の図書室に保存されているが、主な史料は英国バーミングハム大学の図書館に納められている。オックスフォード大学にも CMS の史料が納められている。また、2000年にアダム・マシュー出版社は CMS 史料の大半をマイクロフィルム化した²⁴。この中にアフリカ、インド、北米、または日本や中国などの貴重な史料が含まれている。東アジアにおける CMS の史料が 100 リール以上に納められている。その中に宣教師の手紙、本部委員会の記録などが含まれており、福建伝道団に関する史料、特にウォルフの手紙が納められている。ウォルフは長くて詳しい手紙を度々書いていたため、これらを中心にし、140年後の現在でもウォルフの中国に対する印象、そしてその伝道対策に関する思想、その行動の動機、それからその活動の幅について詳しく調べることに、そしてウォルフに関する事例研究を行うことが可能である。加えて、ウォルフと一緒に伝道活動を行っていたクリブ (A.W.Cribb, ?~?) やマフード (J.E.Mahood, ?~1875) など宣教師の手紙も残っており、彼らの目から見たウォルフ像を描くことも可能であると思われる。

これに加え、CMS が当時出版していた『英国教会の宣教情報雑誌』という雑誌も残っており、これもマイクロフィルム化された²⁵。この中にはウォルフや他の宣教師が書いた手紙や報告、中国伝道に関する考察の記事、それに伝道成果に関する統計なども含まれている。そして、当時出版されていた『中国における活動記録と宣教雑誌』²⁶もマイクロフィルム化され、残っている。この中にそれぞれの伝道会の活動に関する記事、宣教師の死去やその子供の出生、伝道会により伝道対象として目指されていた地域、地名などというたくさんの情報が入っている。

以上の史料に加え、特にウォルフに関する事例研究に役立つ史料がロンドンにある英国国立文書館²⁷に納められている。特に度々迫害に際し領事の干渉を求めたウォルフと関わった英国のシンクレア領事の手紙などの記録が残っている。

以上のこの四つの貴重な史料を中心に、ウォルフに関する事例研究が 21 世紀の今でも可能であることが明確であると思われる。この貴重な史料を研

究し、理解し、そして生かすことによって、これまでの本研究分野の不足している部分を満たすことができるのではないかと思われる。

2. CMS の中国伝道とウォルフ

(1) CMS による福建伝道

ここで CMS という英国教会がどのような過程で東洋の中国、そして福建省に入るに至ったのかを簡単に紹介したい。その上でウォルフの渡来と中国観を分析していきたいと思う。

前述のとおり、CMS という伝道会は英国教会が 1799 年に設立したのであるが、CMS において中国伝道を始めるという発想が初めて表れたのは 1801 年である²⁸。しかし、当時、中国に入るのが不可能であると認識されていたため、その意図が実現されなかったのである。1824 年にロンドン伝道会のモリソンが英国にいたころ、CMS 委員会と相談が持たれたが、それでも中国伝道への進路が見えず、CMS の中国伝道の開始はさらに遅れることとなった。1836 年には CMS のスクワイヤ (Edward B. Squire - 当時のインド海軍員²⁹) が、偵察のため、シンガポールと澳門でしばらくの間滞在したが、その二年後英国に帰った。

しかし、1844 年に南京条約締結直後、中国伝道のためとして、匿名の人から巨額の寄付金 (当時の 6000 ポンド) が与えられたため、当年度で 2 人の宣教師が中国に派遣された。1844 年から 1846 年にかけて、オックスフォード大学のジョージ・スミス (George Smith, ?~1871) とダブリン大学のトマス・ムクラッチ (Thomas McClatchie, ?~1886)³⁰ という二人の宣教師が予備調査を行うため、中国へと派遣された³¹。そこで南京条約の規定により開港されていた福州を含め、一つ一つの条約港や香港島と舟山島を訪れ、そこに宣教師を派遣すれば得られるであろう成果を検討した。スミスは CMS が上海と寧波でステーション (すなわち、基本的に宣教師の定住しない、伝道所となるビル、または施設) を設立してから次に福州でステーションを設立すべきであると提案した³²。スミスは病により 1846 年に帰国したが、ムクラッチは上海に住み着き、CMS の北中国伝道団の事務局長として 9 年間伝道活動を行なってから帰国した³³。

それから CMS は 1847 年にラッセル (William Armstrong Russell, ?~1879、浙江省に)、ファーマー (William Farmer, ?~?)、コブルド (Robert Henry Cobbold, ?~?) が中国に派遣され、1849 年にホブソン (John Hobson, ?~?) が派遣され、同年にゴフ (F. F. Gough, ?~?, 浙江省に)、ウエルトン (William Welton, ?~1857)、ジャクソン (R.D. Jackson, ?~?)、モンクリーフ (E.T.R. Moncrieff, ?~?) が香港における CMS のビクトリア監督者となったスミスと一緒に派遣される³⁴。コブルドとラッセルは 1848 年寧波に入り、伝道活動を始めた³⁵。

1850 年からウエルトンとジャクソンが福州に入り、布教や医療活動を始めた。1873 年にラッセルが北中国の監督者に任命され、1880 年に上海と浙江省から成り立つ中国中部伝道団が設立された。そして、1897 年に中国中部伝道団がさらに三つの地域に分けられた。これは香港と広東省と福建省から成り立つ南中国伝道団、そして中国中部伝道団と西中国伝道団 (四川省) という三つの伝道団に分けられた。1900 年に CMS の福建省における活動が南中国伝道団から独立し、福建伝道団と名付けられた。

独立した福建伝道団の設立自体は、福建省が CMS にとってどんなに重要な地域になっていたのかということをはっきりとするとと思われるが、20 世紀に福建伝道団で見られるようになった成果、すなわち改宗者の急増、または福建協和大学の共同管理等は、CMS の福建省における伝道の初期から見られたわけではない。

実際には、1859 年まで一人の改宗者も獲得されなかったため、CMS として福建省から完全に撤退し、寧波に集中しようという声も出るようになった。しかし、1858 年に福州に派遣されたスミス (George Smith, ?~1863; 上述のスミスと別人) は CMS が福建省から後退すべきではないと言い張った³⁶。その後、1860 年に、スミスはキリスト教に関心を持つ三人の求道者に出会い、彼らを改宗に導き、CMS の活動により獲得された信者の数がそこから増えるようになった。

1896 年に出版された『中国伝道手引書』³⁷は当時の CMS とその他の伝道会の活動に関する統計をあげている。当時の CMS の浙江伝道団と福建伝道団の統計を比較してみると、表 1 の通りになる。

表 1：1896 年における CMS の福建伝道団と浙江伝道団による活動の成果の規模

伝道団	信者数	1893 年の大人受洗者数	1893 年の子供受洗者数	求道者 ³⁸	1893 年の中国人信者献金総額
福建	1,924	307	141	5,308	\$3095.9
浙江	790	146	92	236	\$550.37

注：The China Mission Hand-Book, pp. 36-37.

以上の統計から分かるのは CMS の中国伝道において、CMS において有名となった福建伝道団による活動の成果が浙江伝道団のそれよりも大規模なものであったということである。他に CMS 福建伝道団による活動の規模を明らかにする統計も残っているが³⁹、表 1 は福建伝道団の活動による成果は規模が比較的に大きかったということを明らかにしている。

さらに 1920 年代の統計によると、福建伝道団による活動の規模は表 2 の通りである。これは福建での活動が順調に発展したことを示していると思われる、その基礎を作ったのがウォルフであったといえよう。この表で見えるように CMS による中国伝道の成果は 1920 年代までに福建省がその半分ぐらいを占めていていた。

表 2：1921 年当時の CMS による中国伝道における福建伝道団の規模

	ステーション数	教会数	宣教区数	キリスト教徒数
福建省	25	221	342	5,136 人
中国全土	58	421	535	1,0861 人

注：中華統行委弁会調査特委員編『中華帰主』1922 年、第 3 編 33 ページおよび第 6 編 9 ページ。

(2) ウォルフの中国渡来

以上述べたように CMS が福建省から撤退しそうな時期に、ウォルフが中

国に渡来した。福建省における CMS 伝道活動は 1850 年に始まったものであるが、『福建省でキリストのために』⁴⁰という書物は 1904 年に書かれ、福建省における CMS 伝道活動の最初の 53 年間ほどを描いている貴重な資料である。そこに CMS 本部から福建省に派遣された宣教師名が記されている。1850 年から 1870 年まで福建省で活動した宣教師は表 3 の通りである。表 3 から分かるのは 1850 年から 1870 年までの間、8 人の宣教師が CMS 本部から福建省に派遣されたが、そのうちの 6 人が短期間で帰国、または死去した。この時期に渡来した宣教師の中で一番長く滞在したのはウォルフである。

ウォルフは現在のアイルランド共和国コーク郡スキバリーンの出身で、1857 年に CMS が宣教師訓練のために 1825 年 1 月 31 日に設立した⁴¹イブリンントンカレッジに入学し、学長のチャイルド (C. F. Childe, ?~1898) の下で学んだ⁴²。ウォルフはその後福建省に派遣されたが、ウォルフの死亡記事に CMS 福建伝道団とウォルフ大執事の歴史がほぼ同じであると記されている⁴³。これはまさに福建伝道団においてウォルフがどれほど重要な人物となっていたかを表していると思われる。

訓練を受けた後ウォルフは 1861 年 12 月に英国から中国へ出発した。『福建省でキリストのために』によると、福州に到着したのは 1862 年の夏である⁴⁴。

ヨーロッパで生まれ育ったウォルフが中国に渡来し、どのように中国文化と対面し、そして適応したかを、ウォルフが残した詳細な手紙を史料としてみていきたいと思う。

表 3 : 1850~70 年まで福建省に派遣された CMS 宣教師の一覧表

宣教師名	福建省 渡来年	滞在期間	死亡年または場所
ウエルトン	1850 年	6 年間	1857 年、英国で
ジャクソン	1850 年	2 年間	(1852 年に上海へ)
ムコー	1855 年	2 年間	1857 年、福州で
ファーンリ	1855 年	4 年間	1859 年退職?

スミス	1858年	5年間	1863年、福州で
ウォルフ	1862年	53年間	1915年、福州で
クリブ	1864年	7年間	1871年帰国
マフード	1869年	6年間	1875年、病気のため英国行き船で
合計：8名			

注： *For Christ in Fuh-kien*, pp. 179-183.



ジョン・リチャード・ウォルフ

注： *For Christ in Fuh-kien*, p.10.

(3) ウォルフの中国観

ウォルフが福州に到着した当時、CMS の宣教師は上述のスミスがすでに活動していた。スミスはその翌年の 1863 年 10 月に死去したが、それまではウォルフと二人で CMS の布教活動を行った。クリブの 1864 年の渡来までは、ウォルフは数ヶ月間福建省で唯一の CMS の宣教師であった。

産業革命、そしていわゆる西洋における「キリスト教的覚醒」(evangelical revival、すなわちキリスト教の原点である恵みによる救いという信仰や万国伝道という目標の復興運動)を経た英国から、衰退しつつあった清末の中国に入り、そしてしばらくの間福建省で CMS の唯一の宣教師であったウォルフは、どのような文化的ショックを体験したのだろうか。中国文化との対面がウォルフの後の行動に影響を与えるようになったと思われるが、ウォル

フの中国滞在初期における同国文化への態度はどうであったのであろうか。

実はウォルフは中国に入った当初は、それほどスムーズに中国の現状に慣れることができなかった。これは多くの宣教師と共通している点であろうが、ウォルフ自身の文化的ショックを理解することが、その後の彼の行動を把握するためには非常に重要であると思われる。

ウォルフの手紙によると福州に関する彼の最初のイメージは汚くてひどいところというものであった⁴⁵。後にウォルフが伝道旅行に出かけると、訪れたところの卑猥さを度々手紙で強調するようになった。数年間たってもウォルフがまだこのことを強調していたのは彼がすぐには当時の中国の現状に慣れることができなかったことを示していると言えるであろう⁴⁶。

そして、中国人に対するウォルフの見方は二つの側面があったようである。一方ではウォルフは中国人が非常に不正直であると思っていたようであるが、もう一方ではキリスト教信仰を捨てるよりは自分の命を捨てる方がましであると考えた中国人信者を褒めた⁴⁷。ダンチによると、ウォルフはその他の数人の宣教師と違い実に中国人を好んだと書いているが⁴⁸、ウォルフの手紙の中に見える一般の中国人に対する低い評価を考えると、ダンチの評価が不適切であると思われる。ウォルフがすべての中国人を嫌ったとは決して言えないが、総じて言えば彼は優越感を持ち、中国を蔑んでいたとは確かに言えることではないかと思う。

たとえば 1865 年に伝道旅行に出かけると、一ヶ月間中国人のように生活しなければならなかったと述べているウォルフは、普段福州で中国人らしい生活ではなくむしろ英国人らしい生活（習慣や服装等の面）を送っていたことを示唆している⁴⁹。そして伝道旅行でも食事の時にナイフとフォークを使ったことが記録されている⁵⁰。これらの事実を勘案すると、ウォルフはテーラーほど中国文化を身に着けようとしなかったようである⁵¹。ある伝道旅行の時にウォルフが船上で不注意な発言をし、中国人を侮辱したという事件の記録も残っている⁵²。この事件の他にウォルフが意識していなかったとしても、文化的に礼を失った行為に起因する事件もあった可能性がある。すなわち、上述の事件にウォルフは気づかされ、そして手紙に書いたが、多くの人と衝突するようになったと言われてきたウォルフが気づいていない、または

気づいても本部に知らせたくなかった事件があった可能性も高いのではないかと思われる。これらのことは後に起ころうとしていた中国人官吏などとの摩擦の背景にある一つの原因ではないかと思われる。

しかしながら、ウォルフが全く中国文化に慣れなかった、または自分を中国文化に適応させようとしなかったとは決して言えない。伝道旅行において1人乗り箱型いすかごをいつもは使用しなかったこと⁵³、またはその旅行に出かけるときに中国式の服装を着ける習慣があった⁵⁴ことも記録されている。

だが、食べ物や服装などに関する習慣の他に、ウォルフが中国を暗い目で見ていたことを証明する言葉がその手紙の中に残っている。例えば、アヘン問題に関しウォルフは次のように述べている。

すなわち、イエスの教義が与えられているが、あなた方〔中国人〕は「私たちはイエスを要らない」と言う。あなた方はイエスを呪っている。イエスを憎んでいる。イエスを嫌っている。アヘンを好みながら確かに有罪である私の同国民を悪く言うが、実はこの問題においては中国人が一番悪い⁵⁵。〔かぎ括弧と傍線は筆者〕

この他にも、ウォルフの手紙において西洋人として中国に対するその優越感を明らかにする言葉がたくさん残っている。このようにしばらく徐々に高ぶっていったとも言える態度を持つウォルフが、その自己のプライドを持っていた中国の郷紳層と対面したときに、摩擦が起こったことは当然なことであると思わされる。

おわりに

本稿ではまず CMS とウォルフに関する先行研究の成果と課題を明らかにした。中国における CMS の活動を述べてきた先行研究は少ないながら、そこにウォルフの活動と役割が述べられており、中国における CMS の活動に関するさらなる研究と、ウォルフに関する伝記的研究の必要性が示唆されていた。

ついで福建省におけるウォルフの活動などに関する事例研究のために必要な一次史料を考察した。これらの史料を駆使することで、中国で 53 年間活動し、中国におけるプロテスタント伝道史に非常に大きな役割を果たしたウォルフの貢献や弱点が具体的に見えてくると思う。

本稿ではごく簡単ではあるが、中国における CMS の活動を検討し、その最大の拠点であった福建伝道会の発展は、ウォルフの功績であること、またウォルフは他の中国文化を理解しようとした宣教師たちと比較すると、中国に対する侮蔑の意識が強かったこと等を明らかにした。

今後は当時の中国社会におけるキリスト教の否定と受容の原因を、ウォルフの実際の伝道活動の分析を通じて、より深く検討していく必要がある。

註

- ¹ Latourette, Kenneth Scott *A History of Christian Missions in China*, Ch'eng-Wen Publishing Company, 1966.
- ² アイルランド共和国のアビストルーリ教区記録簿によると、リチャード・ウォルフ夫妻の息子であったジョン・ウォルフが 1831 年 3 月 7 日にタウンゼンド牧師より洗礼を受けた記録が残っている。当時赤子は生まれてからすぐに洗礼を受けるのが普通であったため、1831 年の始め頃生まれたとすれば間違いないと思われる。Representative Church Body Library (Dublin), P.812.1.1 [「P.812」はアビストルイ教区記録で、「1.1」は洗礼・結婚・葬式記録である]。
- ³ *Church Missionary Society Archive*, Adam Matthew Publications Ltd, 2000 (<http://www.adam-matthew-publications.co.uk>) (以下「CMS 公文書」とする) C CH M 3 (CMS 公文書 213 リールにある「Committee of Correspondence (C)」の「China(CH)」「Mission Book 3」)、1862 年 4 月 17 日の手紙。
- ⁴ *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, American Presbyterian Press, 1868-1916, Vol.1, p.6. しかし 1916 年 47 号 695 ページにはウォルフは娘三人がいたと書いてある。
- ⁵ McClelland, T *For Christ in Fuh-kien*, Fourth Edition, Church Missionary Society, 1904, p.180.
- ⁶ *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Vol.47,1916, In

Memoriam Venerable Archdeacon John Richard Wolfe, V.P., C.M.S., p.696.

- ⁷ ただし、*The Chinese Recorder and Missionary Journal* の 47 号によるとウォルフは 82 歳で死去した (695 ページ)。
- ⁸ Stock, Eugene *The History of the Church Missionary Society Vol.1-Vol.4*, Church Missionary Society, 1899; 本史の日本に関する部分の和訳は 2003 年に出版された (ユージン・ストック『英国教会伝道協会の歴史』聖公会出版、2003 年)。
- ⁹ Carlson, Ellsworth C. *The Foochow Missionaries 1847-1880*, Harvard University Press, 1974.
- ¹⁰ Hewitt, Gordon *The Problems of Success- A History of the Church Missionary Society 1910-1942, Vol.2 Asia*, SCM Press LTD, 1977.
- ¹¹ Hewitt, Gordon *The Problems of Success- A History of the Church Missionary Society 1910-1942, Vol.1 In tropical Africa, the Middle East, at Home*, SCM Press LTD, 1971.
- ¹² *ibid.*, p.242.
- ¹³ ケビン・ウォードは現在 CMS の役員の一である。
- ¹⁴ Ward, Kevin and Stanley, Brian *The Church Mission Society and World Christianity, 1799-1999*, William B. Eerdmans Publishing Company, 2000.
- ¹⁵ Dunch, Ryan *Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China 1857-1927*, Yale University Press, 2001.
- ¹⁶ Welch, Ian *Nellie, Topsy and Annie: Australian Anglican Martyrs, Fujian Province, China, 1 August 1895*, First TransTasman Conference on Australian and New Zealand Missionaries, At Home and Abroad, Australian National University, Canberra, October 8th-10th 2004. (rspas.anu.edu.au/pah/TransTasman/papers/Welch_Ian.pdf, 2005 年 7 月 15 日に参照)。
- ¹⁷ *The Foochow Missionaries 1847-1880*, p.79.
- ¹⁸ *ibid.*, p.106.
- ¹⁹ *ibid.*, p.169.
- ²⁰ Dunch, *op.cit.*
- ²¹ *ibid.*, p.19.
- ²² 陳名実「福州烏石山教案始末」
<http://www.fjsq.gov.cn/ShowText.asp?ToBook=1094&index=120> を参照 (2005 年 5 月 30 日参考)。

- 23 「福州烏石山教案始末」、1-2 ページ。
- 24 CMS 公文書；<http://www.adam-matthew-publications.co.uk>。
- 25 *Church Missionary Intelligencer, 1849-1927*, E.P. Microform, 1967.
- 26 *The Chinese Recorder and Missionary Journal*.
- 27 <http://www.nationalarchives.gov.uk/>
- 28 Moule, Arthur E. *The Story of the Cheh-Kiang Mission*, Church Missionary Society, London, 1891, p.8.
- 29 *History of the Church Missionary Society, Vol I*, p.468.
- 30 *History of the Church Missionary Society, Vol III*, p.560, 中国渡来から 40 年後に死去したという。
- 31 Smith, George A *Narrative of an Exploratory Visit to Each of the Consular Cities of China, and to the Islands of Hong Kong and Chusan, in Behalf of the Church Missionary Society, in the Years 1844, 1845, 1846*, Seeley, Burnside, & Seeley, 1847.
- 32 *ibid.*, p.375.
- 33 *History of the Church Missionary Society, Vol III*, p.223.
- 34 *History of the Church Missionary Society, Vol I*, p.474.
- 35 *The Story of the Cheh-Kiang Mission*, p.186.
- 36 Stock, Eugene *History of the Church Missionary Society, Vol II*, Church Missionary Society, London, 1899, p.308. ここでミスはニュージーランドに派遣された CMS の宣教師が 10 年間成果のない中で諦めなかったこと、その後成果を得るようになった事実や、福建省で働いていたアメリカ人宣教師がすでに百人の信者を得ていたことや、逆に福州における活動を拡大し、聖書の約束をしっかりと信じれば収穫は必ずとれるようになるだろう等という論点をあげて、CMS の役員会が福建省から撤退しないように説得しようとした。
- 37 *The China Mission Hand-Book*, American Presbyterian Mission Press, 1896.
- 38 ここで「求道者」とはキリスト教に関心を示している人を指している。
- 39 例えば、『中華婦主』、中華統行委弁会調査特委員編製、1922 にある統計。ただし、本統計は 1920 年代当時のものであり、本論文で取り上げる時代と大きく異なるためここで詳しく取り上げない。
- 40 *For Christ in Fuh-kien*.
- 41 Stock, Eugene *History of the Church Missionary Society, Vol III*, p.265.
- 42 *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Vol.47, *In Memoriam*・

Venerable Archdeacon John Richard Wolfe, V.P., C.M.S., p.695.

⁴³ *ibid.*, p.696.

⁴⁴ *For Christ in Fuh-kien*, p.10. 具体的にはウォルフが福州についてから初めて本部に送った手紙によると、香港から厦門経由の船で1862年4月16日に福州に着いたという（CMS公文書、C CH M 3, 1862年4月17日付の手紙）。

⁴⁵ CMS公文書、213 リール、C CH M 3、1862年4月17日の手紙。

⁴⁶ CMS公文書、226B リール、C CH O 92 [「O」は本部への手紙という意味である]。その4年後の春に書いた手紙にも伝道旅行中の訪れた町とその泊まったところの家具の不衛生を強調した（1865年10月の手紙）。

⁴⁷ *ibid.*、本部への1865年5月22日の手紙。

⁴⁸ *Fuzhou Protestants and the Making of a Modern China 1857-1927*, p.20.

⁴⁹ CMS公文書、226B リール、C CH O 92、1865年10月；「私たちは中国人のように生活するように強制された」。

⁵⁰ *ibid.*、1865年10月の手紙。

⁵¹ Taylor, Mr and Mrs Howard Hudson *Taylor and the China Inland Mission: the Growth of a Work of God*, China Inland Mission, London, 1920, pp.89-90.

⁵² CMS公文書、226B リール、C CH O 92、1868年9月28日の手紙。

⁵³ *The Chinese Recorder and Missionary Journal*, Vol.47, p.699.

⁵⁴ CMS公文書、227A リール、C CH O 92、1867年1月の手紙（1866年度報告書）。

⁵⁵ CMS公文書、226B リール、C CH O 92、1865年10月の手紙。

(asianflame@gmail.com)